

書評

佐々木高明 著

南からの日本文化(上)

—新・海上の道

書評
南からの日本文化(下)
—南島農耕の探求

菅 豊

四六判/311ページ 本体価格：1,160円 2003年9月刊 日本放送出版協会	四六判/282ページ 本体価格：1,120円 2003年9月刊 日本放送出版協会
---	---

高名な著者、佐々木高明氏の業績について、今さら改めて紹介する必要は全くないように感じられる。しかし、批評すべき本書は、同氏のライフ・ワークの結晶ともいえる著作であるがゆえに、まずどうしても同氏の研究のバックグラウンドに触れぬ訳にはいかない。

まで根を張っているようである。厳密にいうと、「照葉樹林文化論」の最も早い提唱者として中尾佐助(中尾 一九六六)や上山春平(上山編 一九六九)らを指すべきであろうが、「照葉樹林文化論」が、これほどまでに多くの人々に注目され、人口に膾炙したことは、著者の存在なくしてあり得なかったといっても過言ではない。

著者は、一九八二年刊の「照葉樹林文化論の道」(佐々木 一九八二)によって「照葉樹林文化論」を総覧し、さらにその後、「照葉樹林文化」とは異なったナラ・ブナ帯に展開する北方系の文化の流れを「ナラ林文化」という枠組みを設定して理解し(佐々木 一九九三)、東アジアにおける日本文化の多元的な形成プロセスの究明に努めてきた。

「日本人、そのアイデンティティの基礎にある日本文化はどのように形成されてきたのか」(佐々木 二〇〇三a 一)という問い。この一つの問いに、実に三〇有余年の長きにわたって、著者の関心は注がれてきた。著者は、この問いに関して、極めて古い時代から、日本列島には北方、南方のルートで多様な多元的な文化が伝来し、それが日本において堆積・融合して独自の文化を形成させたがゆえに、日本文化は多重構造をもつという答えをすでに出している(佐々木 一九九七)。そのような多元的な日本文化形成における、大きな南からの流れとして提示したのが、本書で取り扱われる「南からの日本文化」である。

●書評
●書誌紹介
「南からの日本文化(上)―新・海上の道」
「南からの日本文化(下)―南島農耕の探求」
「現代民俗論考」ヒト・モノ・動植物の想像―
「近代の漁撈技術と民俗」
「日本人の相対的環境―研まれない空間―の歴史地理学」
「新修豊中市史 第七巻 民俗」
「漂泊する神と人―民間話話の民俗学的研究―」
「金屋子神信仰の基礎的研究」

著者は、長年にわたって東南アジア、東アジア、南アジアという広大な、しかし、ある文化的な系譜が「予想」されるフィールドにおいて精密な調査研究を継続してきた。一九七〇年に、熱帯の焼畑(佐々木 一九七〇)を上梓したのを手始めに、翌年には「稲作以前」(佐々木 一九七二)、また、日本の焼畑(佐々木 一九七二)を立て続けに発表し、焼畑農耕文化の淵源を探る研究に先鞭をつけた。

著者は、一九七〇年代、「照葉樹林文化論」を提唱する論客として一世を風靡し、その後八〇年代にかけて隣接の民俗学、考古学にまで大きな影響を与えた。たとえば、民俗学においても、同時期に稲作中心主義を批判する「イモと日本人」(坪井 一九七九)が坪井洋文によって華々しく開陳され、日本民俗学界に大きな影響を与えた。その論は「照葉樹林文化論」と呼応して語られており、明らかに著者の「照葉樹林文化論」に共振して発生した文化論であったといえる(坪井 一九七九、一九八二)。また、「照葉樹林文化論」は、赤坂憲雄を中心に主張される「もうひとつの日本」言説にも、少なからぬ影響を与えているようであり(赤坂編 一九九九)、今の民俗学のある部分にも奥深く

著者は、本書において、「南島農耕文化」というべき文化クラスタが日本の南西諸島に古くから存在し、それは、日本本土の農耕文化とは明らかに違う特色を有し、その文化的系譜がさらに南の諸地域に求められるとする。この「南からの日本文化」は、本書(上)の副題に「新・海上の道」と題するように、柳田國男が提唱した「海上の道」説を大いに意識したものである。そして、それは、柳田の仮説と同じく、南島地域を南下する方向に一つの文化的系譜を求めたものである。しかし、柳田の仮説と著者の仮説とは、水稻栽培の伝来に関する見解と、文化の系譜の単元性/多元性という見解において大いに異なっている。それが、「新・海上の道」と唱える所以である。

柳田の「海上の道」説では、日本人のルーツや稲作渡来のコースとして単元的に南島経由の「海上の道」が想定された。そして、その伝播の起点は南中国に求められた。一方、著者が唱える「新・海上の道」説では、日本文化のルーツを多元的に南北に求めつつ、南方からの「南島系根栽農耕文化(根栽||雑穀型文化)」の到来を主張する。それは、南中国と東南アジアに源流を求め、台湾経由で南西諸島に入ったとする。著者の仮説を、簡潔に要約するならば、南西諸島を経由してオーストロネシア型の熱帯ジャポニカを中心とする稲作が北上し、それに「伴う」あるいは「先行する」形で熱帯系のイモとアワを主作物とする農耕文化||「南島系根栽農耕文化(根栽||雑穀型文化)」が同じルートを北上したということである。そして、それは弥生時代

の本土での本格的な稲作文化に影響を与えたということである。このような、文化伝播の構図を、精緻に理詰めで論証するために、本書の多くの紙数が割かれている。

本書は、(上)(下)の二冊でなっているが、まず、(上)は、南島の農耕の特色を探り、そして、先に述べた「南島農耕文化」といべき文化クラスターの存在を検証する論考である。(下)は、一九七〇年代に著者が行った「南島農耕文化」に関する民族学的調査成果の集成である。

読者の中には、すでにお気づきの方もいらっしゃると思うが、実は、本書の主題である、「南島農耕文化」の存在と、南西島嶼部を伝わって南方文化が北上したというアイディアは、著者の研究の出発点に位置づけられる「稲作以前」(佐々木 一九七二)に、すでに提示されており、本書のスキームは、著者が三〇有余年主張してきた大きなスキームと何ら変わりはない。三〇数年前に書いた自著の中で、著者は、以下のように述べる。

「柳田國男氏の唱えられたのとは別の意味の『海上の道』すなわち、『南島系根栽農耕文化』とでもよぶべき一つの文化の流れが南方の島々から、わが国の九州の南辺にまで、ある時代に達したと想定することができるのではないだろうか。南十字星の美しい光芒のもとで、私は想像の翼を思い切りひろげてみた。もともと、南島考古学の示すところからは、このような南から北へ向かう文化流の存在したことを肯定するような積極的な資料をいまのところ見出すことは難しい。したがって、このよう

な『南島系根栽農耕文化』の北伝した「海上の道」を想定することは、南十字星のもとでみた単なる私の幻想にすぎないかもしれない」(佐々木 一九七二 三〇九～三一〇)

自説に確たる証拠を突きつけられないもどかしさが、いかにも行間に滲み出ているが、この遠慮がちで自信なきな仮説の弱点を補強し、より強固で説得力をもつ仮説に高めることが、著者の三〇年以上の研究の営みであった。そして、その営みの蓄積度、厚みを披瀝することが本書の最大の目的となっている。

すでに述べたように、本書において、立論の枠組みはそれほど目新しいものではない。それは、著者によって、すでに三〇年以上も前に主張されていたことである。しかし、そのスキームを強化するために採用した手法や素材は、実に多方面、多研究領域にまたがっており、自説を細部にまで論証しようとする著者の並々ならぬ意欲が見られる。このインター・ディシプリンに果敢に挑戦する姿勢は、それ自体が本書の最大の特徴であり、最大のセールス・ポイントになっているといっても良い。

筆者は、民族学のみならず、民俗学、考古学、歴史学の蓄積を照合する。さらに、植物学や作物学、遺伝学など関係諸科学の最新データを広く参照し、自身が三〇数年前に行ったフィールド・ワークの結果と総合した。ある時は、縄文の出土資料を細かく吟味したかと思えば、また、ある時は、『日本書紀』『常陸国風土記』『季朝実録』『琉球国由来記』…等々の千年近くの年代差をもつ文献を博搜し、さらに、ある時は数十年前の現実

に存在していた人々の生活の実地のサーベイを反芻し、そして、ある時は、ヤマイモの染色体数やアワの遺伝的特性、そして、イネのDNA分析による新しいアプローチに注目して、三〇数年来の自身の仮説を強化していった。このような大胆な学際研究によって確立されたのが、「新・海上の道」説なのである。

さて、著者が収集し依拠した学際的なデータそれぞれが、果たして著者の仮説へ適切に付会されているのかどうかは、あまりにも多彩な分野にそれが及んでいることからして、評者には正確な判断を下しようがない。ただ、ただ圧倒されるばかりである。しかし、民俗学的なデータの取り扱い方を検討する限り、そこに若干の難点を発見することができる。

著者は、民俗学の成果を、大きく三通りのやり方で取り扱っている。それは、「否定」と「摺り合わせ」、そして、「利用」である。

著者は、民俗学者・柳田國男の「海上の道」になぞらえて、それを超克した新しい仮説を提示したため、まず第一に、柳田を批判の俎上に載せ「否定」する。柳田が、彼の人生の終着点に構想した「海上の道」説であったが、当時より様々な批判が出て、実証的な学問の世界では、必ずしも受け入れられたとは言いがたい。もちろん、柳田の生きた時代には、著者の生きた時代ほど農学、遺伝学、作物学は発展せず、その協業もあり得なかった。しかし、そういう柳田の生きた時代の制約を斟酌しても、著者の柳田批判と誤謬の訂正は至って正当である。柳田は、

「民俗学を古い昔の穿鑿から足を洗わせ」「現代科学の一つにしなければならぬ」(柳田 一九四七 六)と、第二次世界大戦前の自分のあり方を反省したのであるが、結局、死に際にも「古い昔の穿鑿」に終始した。その柳田の「海上の道」説は、ロマンの域を超えるものではなかったのである。明らかに著者の、「新・海上の道」説の方が説得力と科学性をもつ。

次いで第二に、著者は伊波普猷や外間守善、谷川健一らの「日本文化南漸」説を検討する。そして、北漸する「新・海上の道」説と一見矛盾し、抵触しそうなこの仮説に対し、ある程度の賛意を表し、自説と「摺り合わせ」している。これは、実のところ抵触する仮説ではなかった。民俗学の立場から主張された南島への日本文化の伝播Ⅱ「日本文化南漸」説は、著者にいわせると六〇七世紀以降の状況に基づく仮説であり、「新・海上の道」説が想定する縄文時代に比べ、明らかに時代が下っているのである。この「日本文化南漸」説は、著者の仮説をサポートするものでもなければ、邪魔するものでもなかった。

一方、著者は第三に、民俗学の成果を補強するものとして積極的に「利用」している。取り上げられたのは小野重朗の「二つの正月論」(小野 一九八二)、下野敏見(下野 一九八〇、一九八六、一九八九)らを中心とする民俗学者の所見である。前者は、奄美諸島や八重山諸島に「節」という行事が周圈的に残る点に注目したもので、南西諸島において古くは稲作と畑作両方に価値を置く「節」正月が存在したが、その後、稲作中心

の六月の年俗正月が生まれ、沖縄を中心に広がったとするものである。確かに、この説は、稲作に先行する「畑作+稲作の農耕文化」の存在を想起させるものとして、「新・海上の道」説を補強してくれるようである。また、確かに他の民俗学者の述べる正月儀礼や来訪神、稲魂観の分布、そして土掘貝・箕・背負籠・高倉・船などの物質文化の分布が、「南島農耕文化」といふべき文化クラスターの存在を暗示しているようでもある。

しかし、ここで民俗学を研究する立場にある評者は、民俗学的成果が著者によって恣意的に利用されていることを批判せずにはおられない。著者の仮説と一見反対のことをいっている、第二の伊波普猷らの「日本文化南漸」説という仮説を、弥生時代以降の新しい時代のこととして退けるのならば、当然、第三の小野重朗らの所見はもつと新しい時代のものとして退けられてしかるべきである。それらは、著者の構想する仮説が扱った時代から二千数百年も後のデータを基に構築された文化論であり、縄文の古き文化伝統と連続性をもつ確証はどこにもない。縄文時代からの連続性が、全くないといえる証拠を、評者はもっていないが、少なくとも「縄文時代から文化が変わらずに続く」という実証困難なテーゼを証明できない限り、縄文時代の説明に民俗事象を用いるべきではない。この手法では、著者が古き世界に通じると信じる民俗は徹底して掘り上げられ、そうでない民俗は徹底してうち捨てられるのである。

結局、著者が利用した民俗学の成果は、著者のスキームに単

純に「当てはまる」という以上のデータとしての意味をもっていないのである。それは、果たせたとして傍証以上の役割は果たせない。著者が援用した他の科学的データが、評者の素人目でも相当合理的であるように見え、説得力をもっている分、牽強付会に用いられやすい民俗事象の援用ははなはだ余計だったと惜しまれる。

縄文時代から現代まで、そして、東南アジアから日本までという壮大な時空間を交幻自在に跳梁跋扈しながら文化の淵源を探る著者の手法は、どんなに最新の科学的成果と手を結んだとしても、あまりにも大胆過ぎる。しかし、文化の形成と伝播という壮大なテーマを課題とする民族学が文化人類学の中に雲散霧消しつつある中、大林太良氏亡き後、最後の民族学の泰斗として、その手法を採用することはむしろ常套であり、逆に文化分析のジェネラリストとしての民族学者の本領を発揮したものであるとして、積極的に高く評価したい。そして、著者の業績は、今後他者の追隨を許さないことを予言したい。

さらに、民俗学を学ぶ者は、この著者の民族学研究を追隨できるものと誤認してはならないことを、ここで付言しておかなければならない。著者も、同書の中で触れている通り、「現在、我々の身の周りに拡がっている日常的な文化」は「日本中どこへ行ってもほぼ同じ特色をもっている」(佐々木 二〇〇三 a 二)。それを近代の国民国家によって形成された「国民文化」(佐々木 二〇〇三 a 三)と著者はとらえているが、確かに、

そのような文化の均質化というドラマスティックな変化が、近現代に起きている。また、当然、近世、中世、古代においても質や量は異なっても、同様に「変化」は繰り返されてきたはずである。論理的に考えて、より古い時代に繋がる事象は、時代が下がるにつれて減ることはあっても増えることはない。古代の文化的淵源に連なるものとして民俗文化をとらえた場合、それは明らかに控除的なのである。その不可逆的な「変化」の行き着いた先に生きる現在の人々の生活に、フィールド・ワークという方法で接して、生の研究素材を獲得する民俗学は、著者が主張する「新・海上の道」説を、ただ傍観するしかないのである。

現在、日本のどこを民俗学的手法でフィールド・ワークしても、著者がフィールドで構想した壮大な文化論を根底からひっくり返すようなデータを、もう、集めることはできない。また、逆に、その文化論を一見支持するようなデータを収集できたとしても、それは、先に述べたように「当てはまる」といった以上の資料的意味をもたないのである。

評者はすでに、「日本民俗学」誌上のレビューの中で述べてきたが、現在の民俗学においても、未だ安易な文化起源論や、民俗事象を安易に歴史的に遡上させ、実証的な証左を示さないで古物と結合させる歴史還元主義が払拭されていない(菅 二〇〇〇、二〇〇二)。それは、柳田以来、根強く民俗学的手法として継承されている。そのような状況にあつて、本書は、文化の

淵源を探ることがどれほど困難か―著者をして四〇年近い歳月を要した―、また、どれほど多岐にわたる能力を必要とするのかを教えてくれる。本書を読んだ民俗学研究者は、読後、民俗学で文化の淵源を探る道を諦めざるをえないことを、思い知らされるであろう。

参考文献

- 赤坂憲雄編 一九九九 『東北学』一 作品社
 上山春平編 一九六九 『照葉樹林文化』 中央公論社
 小野重朗 一九八二 『奄美民俗文化の研究』 法政大学出版局
 佐々木高明 一九七〇 『熱帯の焼畑―その文化地理的比較研究―』 古今書院
 佐々木高明 一九七二 『稲作以前』 日本放送出版協会
 佐々木高明 一九七二 『日本の焼畑―その地域的比較研究―』 古今書院
 佐々木高明 一九八二 『照葉樹林文化の道―ブータン・雲南から日本へ―』 日本放送出版協会
 佐々木高明 一九九三 『日本文化の基層を探る―ナラ林文化と照葉樹林文化』 日本放送出版協会
 佐々木高明 一九九七 『日本文化の多重構造―アジア的視野から日本文化を再考する』 小学館
 佐々木高明 二〇〇三 a 『南からの日本文化(上)新・海上の道』

日本放送出版協会
佐々木高明 二〇〇三b 『南からの日本文化(下) 南島農耕の探求』 日本放送出版協会

下野敏見 一九八〇 『南西諸島の民俗Ⅰ』 法政大学出版局
下野敏見 一九八六 『ヤマト文化と琉球文化』 P H P 研究所

下野敏見 一九八九 『ヤマト・琉球民俗の比較研究』 法政大学出版局

菅 豊 二〇〇〇 『赤坂憲雄著「山野河海まんだら」』 日本民俗学 二二二

菅 豊 二〇〇一 『自然をめぐる民俗研究の三つの潮流』

『日本民俗学』 二二七

坪井洋文 一九七九 『イモと日本人』 未来社

坪井洋文 一九八二 『稲を選んだ日本人』 未来社

中尾佐助 一九六六 『栽培植物と農耕の起源』 岩波書店

柳田國男 一九四七 『現代科学といふこと』 『民俗学新講』 (民俗学研究所編、明世堂、なお本稿では筑摩書房刊) 定本柳田國男「三一」によった)

評書
松崎憲三 著
現代供養論考

— ヒト・モノ・動植物の慰霊 —

鈴木正崇

A 5 判 / 524 ページ
本体価格 : 9,500 円
2004 年 3 月 刊
慶友社

本書は現代の民俗を供養を通じて動態的に描き出す試みである。現代では少子化や高齢化の影響で、先祖祭祀や葬送墓制、死者供養に変化が起こっているだけでなく、多様なモノや動植物の供養が展開して、「供養ブーム」とさえ言える現象が起こっている。本書は「さまざまな民俗を取捨選択してきた人々が、いかなる理由で今日もなお、ヒト・モノ・動植物の供養に固執しているのだろうか」(二二頁)という問題意識を持って、歴史の変遷を踏まえ、担い手の霊魂観・自然観・道具観を明らかにしている。目次は以下の通りである。

序章 研究の視点と本書の構成

第一章 モノ(道具)の供養

第一節 モノ(道具)の妖怪化と供養

第二節 モノ(道具)の供養の諸相—筆・鉛筆の供養を中心に—

終章 まとめと今後の課題

序章では方法論について述べ、供養とは何かを考察する。供養は「三宝(仏・法・僧)や死者の霊などに対して供物を捧げること」であり、「供養の対象は人間から動物、さらには無生物へと拡大されてきた」という仏教側からの見解(『日本佛敎辞典』一九八八)に暫定的に従う。現行の供養の具例として、追善供養、餓鬼供養、開眼供養、針供養などがあり、霊の成仏を願って、霊が災いをもたらさないようにと願うという。崇りや恐れが感情がわだかまり、不安への対応と解消が試みられている。モノに関わる行事や儀礼は、「〇〇の供養」「××のめぐみ感謝祭」「△△まつり」など名称は様々で、寺院だけでなく神社でも行われる。神道式の「清め」「祓い」もケガレや邪悪な霊を除去する点では供養と同様であり、神仏を区別せずに、一括して「供養」の用語を用いることを提唱する。方法論としては、ジャック・ルゴフの社会史と柳田國男の民俗資料の三分類(有形文化・言語芸術・心意現象)との対応を検討し、広義の歴史学としての民俗学は「民俗を担う人びとの生活変遷史を踏まえて、彼らの心の働きとその力学を解明する」と考える。これには歴史的アプローチと、現在のアプローチがあるが、著者は後者の立場で、過去と現在の対話を含みつつ、変化を見据えて民俗の行方を身定める視点をとり、民俗を時間的伝承、風俗を空間的伝播と考え、相互関係を意識して考察を

第三章 理容業者の信仰と道具観—職祖の祭祀と道具—

第二章 動植物の供養

第一節 草木鳥魚の供養

第二節 鯨鯢供養の地域的展開Ⅰ—寄り鯨地域を中心に—

第三節 鯨鯢供養の地域的展開Ⅱ—捕鯨地域を中心に—

第四節 馬の供養をめぐる—馬頭観音信仰の変遷—

第五節 ペットの供養—犬・猫を中心に—

第六節 英霊および軍馬・軍犬・軍鳩祭祀—靖国神社を事例として—

第三章 ヒトの供養

第一節 沖縄のグソー・ヌ・ニービチ—東アジアの死霊結婚—

第二節 東北地方の死霊結婚Ⅰ—山形県村山地方を中心に—

第三節 東北地方の死霊結婚Ⅱ—霊山および新宗教教団の儀礼—

第四節 間引き絵についての一考察—「家族葛藤図」をめぐって—

第五節 墮胎(中絶)・間引きに見る生命観と倫理観

第六節 死者供養とその変化—葬送儀礼と墓制の分析を中心に—

第四章 塚をめぐるフオークロア

第一節 行人塚再考—修行者の死と供養・祭祀—

第二節 将門塚・道灌塚をめぐる—御霊の供養・祭祀—

第一節 将門塚・道灌塚をめぐる—御霊の供養・祭祀—

日本民俗学

第242号 (2005年 5月31日発行)

目次細目

論文

- 地域社会における祭祀の持続と変化をめぐる一考察
—トカラ列島の事例から—……………田中 正隆 1
沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事
……………加賀谷真梨 35

研究ノート

- 田の美しさ
—富士河口湖町の「空中田植」を事例に—……………渡部 鮎美 64

書評

- 佐々木高明著『南からの日本文化』上・下
……………菅 豊 80
松崎憲三著『現代供養論考—ヒト・モノ・動植物の慰霊—』
……………鈴木 正崇 86
池田哲夫著『近代の漁撈技術と民俗』
……………野地 恒有 92

書誌紹介

- 小口千明著『日本人の相対的環境観
—「好まれない空間」の歴史地理学—』
……………飯島 康夫 97
豊中市史編さん委員会編『新修 豊中市史第7巻 民俗』
……………伊藤 廣之 98
花部英雄著『漂白する神と人
—民間説話の民俗学的研究1—』
……………小堀 光夫 99

編集担当理事 岩田 重則
篠原 徹
鈴木 正崇
高桑 守史
中込 睦子
福田アジオ
福原 敏男

英文担当 ノルマン・ヘイヴンズ

日本民俗学 第242号

2005年(平成17年)5月31日発行

編集兼 日本民俗学会
発行者

代表者 宮本袈裟雄

〒113-0034 東京都文京区湯島4-12-3
TEL・FAX 03-5815-2265
E-mail folklore@pop21.odn.ne.jp
URL http://www.soc.nii.ac.jp/fsj/
振替口座 00100-3-536466

印刷所 朝日印刷工業株式会社
〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67番地

会員頒布 会費年額 8,000円
(人会を希望する方は学会事務局までお問い合わせください。)

☐ (日本複写権センター委託出版物)

本書の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

複写を希望される場合は、(中法)学術著作権協会(03-3475-5618)の許諾を受けてください。